

令和元年度 青桐 No. 44 原稿

書名： 「うしろめたさの人類学」

著者： 松村圭一郎                      出版社： ミシマ社

紹介文：

この夏、書店でこの本を見かけたときに、本の帯にあった京都大学山際総長からの推薦文が目にとまりました。「市場、国家、社会……。断絶した世界が『つながり』を取り戻す。社会を変革する道は『うしろめたさ』に気づき、境界を引き直すことだ」と言う提言は、物欲と孤独に疲れた日本の新しい倫理になるだろう。」

筆者は文化人類学者であり、20年以上に渡りエチオピアでフィールドワークを行っている。日本とエチオピアを行ったり来たりする生活の中で生じる「ずれ」や「違和感」を手がかりに、私たちが当たり前に過ごしてきた現実が、ある特殊なあり方で構築されている可能性に気づかされる。この考え方は「構築主義」といって、何事も最初から本質的な性質を備えているわけではなく、様々な作用の中でそう構築されてきたと考える視点である。その結果、筆者はいまここにある現象やモノが構築されているのであれば、また構築しなおすことが可能であると考えた。その際、理想の方向性として「公平＝フェア」な世界の実現に向かうべきであるとする。

私たちの心と身体は公平さというバランスを希求しており、他者とのあいだに大きな偏りを察知すると、現実についての認識をずらしたり、モノや財を動かしたりすることで対応している。しかし、それぞれに一長一短があり、万能な方法があるわけではない。そこで筆者は、私たちの中の「うしろめたさ」を起動し

やすい状態にすることを勧めている。人との格差に対してわきあがる「うしろめたさ」という自責の感情は、公平さを取り戻す動きを活性化させ、そこにある種の倫理性が宿るとしている。目の前で圧倒的な格差や不均衡を見せつけられると、誰もが何かしなければ、という気持ちになり、バランスを回復したくなる。こうして、倫理性は「うしろめたさ」を介して感染していく。今まで目を背けていた現実への認識を揺さぶられることで、心と身体に刻まれている公平さへの希求が、いろいろな場所で次々と起動し始め、その変化が世界を動かしていく。

最後に筆者は、私たちにできるのは、「あたりまえ」の世界を成り立たせている境界線をずらし、いまある手段のあらたな組み合わせを試し、隠れたつながりに光をあてることであり、それによって、少なくとも世界の見方を変えることは出来るとしている。

皆さんも日頃感じている「ずれ」や「違和感」を手がかりに、「あたりまえ」の世界が、どんなあり方で構築されているのか考えてみてはいかがでしょうか。